

報告タイトル

高良とみと日中関係  
——モスクワ国際経済会議から北京協定へ  
Tomi Kora and Sino-Japanese Relations

— From the Moscow International Economic Conference to the Beijing Agreement

氏名(所属)

黄天凝 (慶應義塾大学)

HUANG TIANNING(Keio University)

要旨(800字程度)

本稿は、日本戦後初のソ連入国者であり、新中国に入国した日本人の一人で、戦後の日中関係の構築において先駆的かつ重要な役割を果たした参議院議員、高良とみの活動を中心に、1952年のモスクワ国際経済会議と第一次日中貿易協定、さらに1953年は中国残留邦人の引揚問題に至るまでの過程を詳細に分析するものである。本研究の目的は、新たな一次資料や外交記録、新聞、回顧録などを用いて、戦後初期の日中関係における高良の役割と彼女が果たした影響を明らかにすることにある。

まず、1952年に開催されたモスクワ国際経済会議での高良とみの活動を検討する。この会議は、東西両陣営間の経済、貿易交流を促進するために行われたものであり、高良は日本唯一の代表として出席し、平和的な東西貿易の重要性を強調した。特に、彼女が日中貿易再開の必要性を訴えたことが、中国代表団との友好関係の構築につながり、その後の日中貿易交渉に重要な影響を与えた。

次に、モスクワ国際経済会議後の高良と中国代表団との接触、そして訪中に至る経緯について論じる。高良はモスクワ会議を通じて日中貿易再開の可能性を見出し、中国からの訪中招待を受け入れて中国へ渡航した。この訪中が契機となり、1952年6月1日に第一次日中貿易協定が締結された。彼女は貿易交渉だけでなく、抑留者の帰国問題にも積極的に関与し、経済交流と引揚の双方を推進する「仲介者」としての役割を果たした。

さらに、1953年の引揚打合せ代表団の活動と「北京協定」に至る交渉過程についても分析する。高良は、中国紅十字会との連携を通じて、戦後日本人居留民の引揚交渉を推進し、引揚げ問題解決に向けた重要な役割を果たした。調印された「北京協定」は、日中両国間の信頼を深め、戦後の日中関係における民間主導の外交の成功例として評価される。

本稿の意義は、従来の研究では解明されていなかった高良とみの具体的な活動や目的、また彼女の中国残留邦人引揚推進に対する執念が、戦後の日中関係構築においてどのように機能したかを新たな視点から明らかにした点にある。また、彼女の帰国ルートや旅券問題、第一次日中貿易協定と中国残留邦人の引揚問題との関連性を新たな一次資料を通じて解明し、歴史的な空白部分を補完したい。